

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態

— アンテューケ州シンボラ村の事例 —

永井博子

はじめに

近年、フィリピンでは海外への出稼ぎ労働が一般および研究者の間でも注目を浴びているが、国内においても労働力移動は活発である。

フィリピン群島中部のパナイ島西岸に位置するアンテューケ州は、広域行政区域区分上、第六区域西ビサヤに属する。この州は、国内でも特に貧しい地域と言われ、また州の人々もそう自称してきた。確かに、アンテューケ州は西をスル海、東をパナイ脊梁山脈に挟まれ、基本的に自給自足の農業・漁業以外に、州内にはめだつた産業は、過去、現在ともに存在せず、雇用機会に関しては寡少であるといえる。同時に、アンテューケ州は、隣島ネグロスの砂糖農園に労働者サカダを供給する地区としても有名であった。輸出を目的としたネグロス島のサトウキビ栽培は、一九世紀終

り頃から大規模化し、収穫時の労働力確保が深刻な問題となっていた。A・マッコイによると、一八八六年、パナイ島の中心地イロイロ市に駐在していたイギリス領事は、「労働力は極めて不足しており、収穫時には当島の西岸アンテューケ州から人を連れてきて、ネグロスのプランテーションでの労働にあたらせている」と書いている¹⁾。ネグロス砂糖農園への労働力提供は、これら砂糖労働者への待遇の過酷さと相俟つて、アンテューケ州のイメージとして定着し、現在に至っている。

一九七〇—八〇年代には、ネグロス砂糖農園労働者の劣悪な労働環境について、学術および人権擁護の立場から調査が行なわれてきた。しかし、労働力提供地域側の流出状況・要因に関する研究は行なわれていないといつてよい。アンテューケ州からの労働力流出は、貧困の土地から出稼ぎへ、特に歴史的に関係の深いネグロスの砂糖農園へ、と

いう一種の類型論を越えて語られることはなかった。一九八〇年代後半にフィリピン砂糖産業が不況に陥った後、これらの砂糖労働者はどうなったのか、その現状を示す資料はまだ何もないといってよい。

砂糖農園季節労働者の契約書は、労働省への提出が義務づけられている。イロイロ市にある労働省第六区域西ピサヤ事務所の記録によると、一九九五年、合計七六二六人の砂糖労働者が、ネグロス・オキシデンタル州あるいはラグナ州カンルバンに向かっている。しかし、これらの砂糖労働者が第六区域のどこから来たかは、一枚一枚の契約書をめぐる作業を経なければ、答えられないであろう。

本稿は、アンテイク州で砂糖労働者を多数輩出するといわれる村落を取り上げ、その人々の生活一般状況を記述した上で、砂糖農園を含めた出稼ぎ労働の現状を示すことを目的とする。第一章では、フィリピン国内労働力移動の流れを人口分布から概観し、第二章では、アンテイク州の雇用機会と労働力移動の一般的傾向を考察する。第三章および第四章では、具体的にクラシイ町シンボラ村の生活状況と出稼ぎ労働の現状を見ていき、最後に若干の考察を行なうこととする。

1 フィリピン国内人口移動の流れ

一九六〇年以前

フィリピンの国内人口移動は、一九六〇年をひとつの転機としている。

一九三九年から一九六〇年までの人口移動は、フィリピン中部ピサヤ地区から南部ミンダナオ地区への大量人口移動で特色づけられる。これは、政府がミンダナオの農業開発に力を入れ、国内の他地域からの農業移民を奨励したことが関係しており、これによってミンダナオ地区への人口流入が起こった。

人口分布パターンをみると、一九四八年から一九六〇年にかけて、ミンダナオ地区の人口が急激に増加し、ブキドノン、ダバオ、コタバト、アグサン、ラナオ・デル・ノルテ各州では、この期間に人口増加率が一〇〇%以上にもなっている。その一方、ヌエバ・ビスカヤの三・七%を最小として、アンテイク、ミサミス・オリエンタル、ボホール各州の人口増加率は一〇%以下となっており、全国平均の四〇・八%^③から見て、これらの州では人口流出があったものと考えられる〔図1参照〕。

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態 (永井)

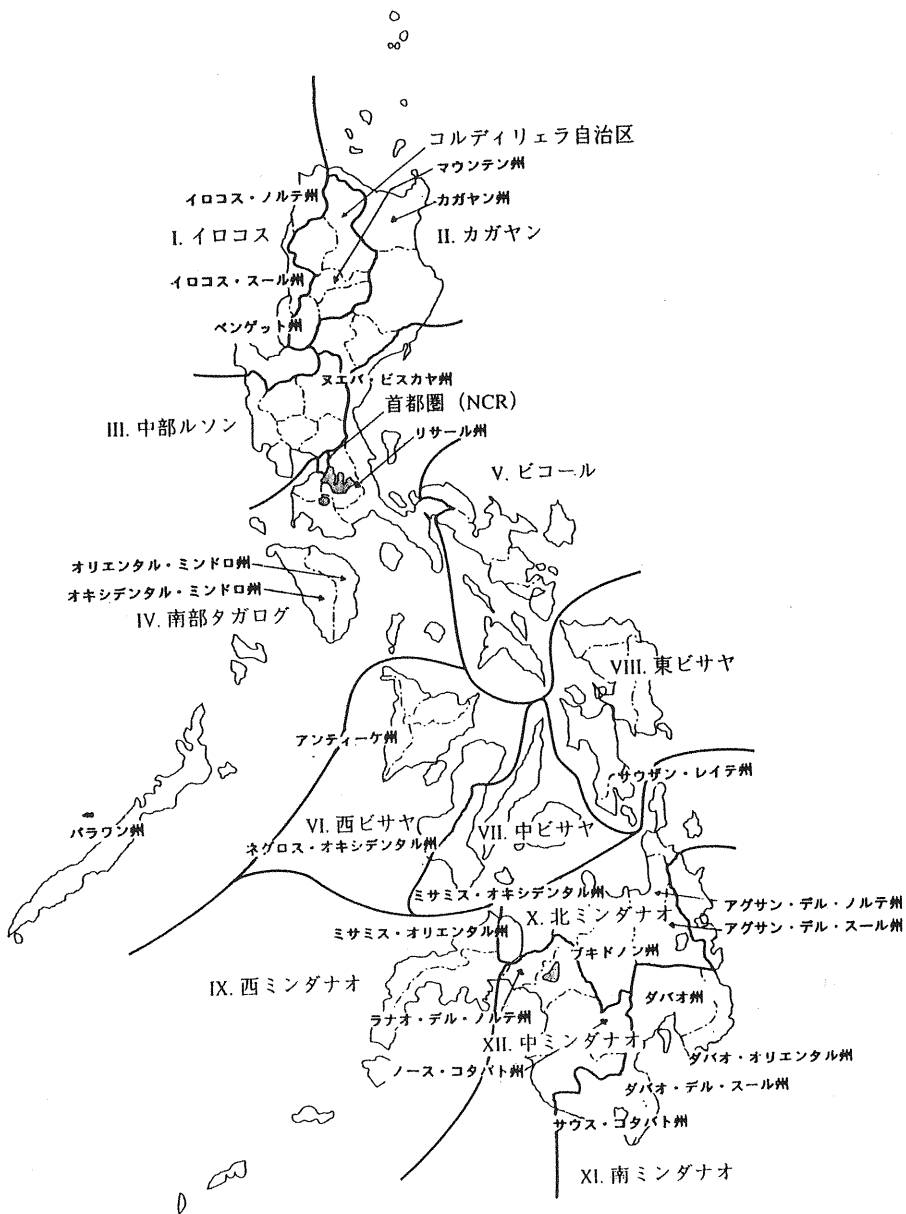


図1 広域行政地区区分と人口移動の顕著な州

また、この時期、首都マニラへの人口流入もあつたが、マニラおよび中部ルソンからの隣州リサールへの人口流入も顕著である³⁾。この流れは、首都へ流入する人口が、首都からあふれて出て郊外にとどまるアーバン・スプロールのパターンとしてとらえられるだろう。

さらに、移動人口の内容をみると、約半数が一五歳から三四歳までの年齢層である。そして、都市部への移動人口の半数余りが女性であるのに対して、ミンダナオ地区の農地開発地域へは男性が大半であることも指摘される⁵⁾。

一九六〇年以後

一九六〇年から一九七〇年までには、マニラ区域、イロコス州、マウンテン州および東ビサヤ、西ビサヤでは人口流出が顕著であつたのに対して、カガヤン州、ルソン南部、ミンダナオでは人口流入が見られた⁶⁾。この時期、特筆すべきは、移動人口中、女性の数が男性の数を上回つたことである⁷⁾。

フリーガーは、この時期の人口移動の大きな流れを四つ挙げている。まず、ミンダナオに代表される農地開発地域への男性労働者の流入。ベンゲット、ラナオ・デル・ノルテなどの州への人口流入がこの例である。第二に、よりよい経済機会を求めて都市部あるいは産業地域へ移動する女

性労働者の流れがある。これには、マニラ周辺部や、ダバオ、コタバトなどのミンダナオ都市部への人口流入がある。第三に、経済機会の少ない農村部から流出する女性労働者の流れが挙げられる。北部ルソンの一部、サウザン・レイテ、ネグロス・オキシデンタル州などからの人口流出がこの例である。第四は、南部タガログ区域の島嶼部やカガヤンなどの経済機会の少ない農村部から流出する男性労働者の流れである⁸⁾。

一九六〇年以降をそれ以前と区分するのは、都市部および産業地区が確立して、女性労働者がそこでの雇用を求めて大量に移動するという独自の流れが生まれたことである。また、農地開発地域への人口流入が次第に減少したことも、一九六〇年以後の特徴である。例えば、一九六〇年以前には農地開発地域として流入地区であつたカガヤン区域は、六〇年代に入って逆に流出地区となつている⁹⁾。

一方、マニラの人口移動をみると、一九五〇年代終りには、マニラへの流入人口が減少して、マニラから郊外地域へと人口が流出し、六〇年代にはその郊外を含む地域全体がマニラ首都圏と考えられるようになった。そして、一九七五年一月、大統領法令によつてあらたに首都区域が指定され、マニラ首都区域は行政上、四つの市と二三の町(ムニシパリティ)を含むことになり、それ以前はリサール州

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

およびブラカン州であった地区が首都区域域に編入された。首都区域周辺地域の都市化は、さらに拡大していき、七〇年代後半には首都区域隣接州、特に南部タガログ区域への人口流入が増加した。

一九六〇年からの人口移動パターンは、現在まで大きな変化を見ることなく来ている。現在、区域外からの人口流入により人口比重が増大しているのは、ルソンでは首都区域、ミンドロ、パラワンを含む南部タガログ区域およびミンダナで、一方ビコール区域をはじめとするビサヤ、ルソン北部のコルデイリエラ自治区、イロコス区域では、人口比重が減少し、人口流出が続いている。

2 アンテイーケ州の人口移動と雇用

人口と雇用機会

アンテイーケ州の属する第六区域西ビサヤは、一九三九年以後、一貫して人口流出地域であった。アンテイーケ州の人口は、一九九〇年現在で四〇万五九二六人となつてゐる。一九三九年から一九九〇年までの人口比重をみると、アンテイーケ州は面積比〇・八四%で、人口比は一九三九年で一・二四%とわずかに面積比を上回っているが、一九六〇年には〇・八七%、一九七〇年には面積比を下回って

〇・七九%となり、それ以後減少の一途をたどっている。^⑩人口密度からみると、第六区域は全国に比較して人口密度が高い地域であるが、アンテイーケ州に限ってみれば、一九六〇年代に相対的に低くなり、全国平均を下回るようになった。一平方キロメートル当り、一九三九年の七八・九人から一九九〇年の一六一・〇人と五〇年間に二倍となっているが、現在に至るまで、全国平均との差はひらく一方である〔図2参照〕。

産業別就業人口構成を見てみると、一九九〇年の全就業人口のうち五九・三%が農林水産業の第一次産業に、九五%が鉄鉱業、建設業などの第二次産業に、二七・八%が商業、サービス業などの第三次産業に従事している。全国的には第一次産業が後退して五〇%を割り、第三次産業部門が増加するという傾向が見えるのに対し、アンテイーケ州では、第二次産業人口の低さはもとより、全国平均の三八・七%に比べて第三次産業部門の寡少が特にめだつてゐる。^⑪

アンテイーケ州の産業は、一口に半農半漁ということばで説明されることが多い。主要農作物は米とトウモロコシで、その大部分が州内消費用である。また、漁業では、遠距離操業といつてもパラワン島周辺までで、大規模な商業的漁業はほとんどなく、沿岸操業で水揚げされた漁獲は、

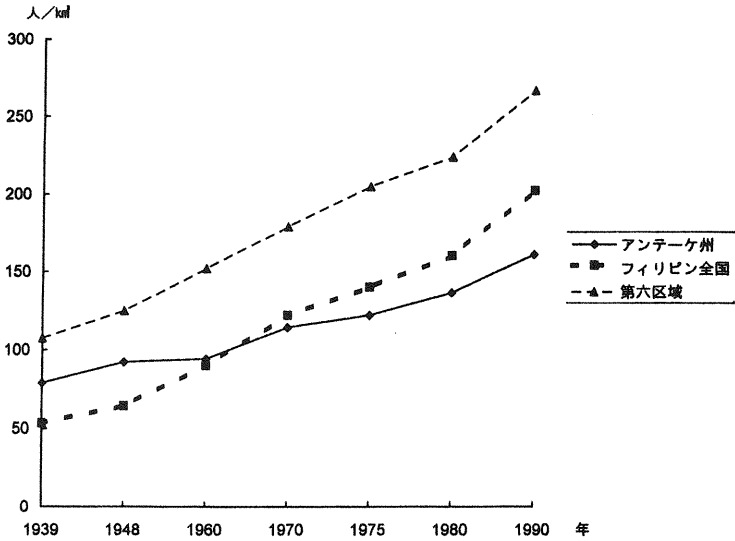


図2 フィリピン全国、第六区域およびアンティーケ州人口密度の変化(1939~1990年)

(出所) NSIC/NSCB, 1995 Philippine Statistical Yearbook, Manila より作成。

これも州内で消費される。イロイロ州に近い地域で養殖池が見られる他、沿岸でのサバヒイ稚魚捕獲が比較的盛んである。

アンティーケ州では、州面積二五二二平方キロメートルの内、傾斜八%未満の低地は約二割しかない。¹³⁾ アンティーケ州は東側を山脈、西側を海で囲まれ、東西の距離は三五キロ、これに対して南北は一五五キロという細長い形をしており、ここでの農業が限られたものであることがわかる。

農業センサスで農地面積の増減をみると、六万七九九七・五ヘクタール(一九六〇年)、五万三六九五・二ヘクタール(一九七一年)、七万三七一三ヘクタール(一九八〇年)、五万三六四〇ヘクタール(一九九一年)となっている。このことの意味は非常に大きい。つまり、第一次産業人口が過半数に達する農業州であるにもかかわらず、農地面積が拡大していないという状況が存在するとみられるからである。そして、その一方で、第二次および第三次産業部門でも増加した人口を吸収するだけの雇用機会を提供しないという要因が重なって、人口が流出する背景が作られていると考えられる。

人口移動

では、アンティーケ州の人口移動状況はどうなっている

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

か、アンティーケ州政府保存の資料でみてみよう。¹⁵⁾

一九七五年から一九八〇年までの流出人口は男性四九二四人、女性六〇八二人、計一万一〇〇六人である。目的地を州別にみると、首都区域が四〇九〇人で流出人口全体の三七%と多い。以下、イロイロ州、ノース・コタバト州、ネグロス・オキシデンタル州、サウス・コタバト州、オキシデンタル・ミンドロ州、パラワン州、アクラン州と続く。また、首都区域を取り囲む産業地帯バタアン、ブラカン、カビテ、ラグナ、リサール五州を合計すると六一一人となり、ネグロス・オキシデンタルへの流出人口を越える。〔図3参照〕。

一九八五年から一九九〇年では、男性五六五〇人、女性七一七八人、計一万二八二八人と増加しており、やはり女性の数が男性を上回っていることは変わらない。首都区域が五二四五人で四一%を占め、イロイロ州、ノース・コタバト州、ネグロス・オリエンタル州までは順位は変わらないが、オキシデンタル・ミンドロ州の代わりにオリエンタル・ミンドロ州が新しい主要出稼ぎ目的地となっている。また、首都区域周辺五州の合計は八四〇人で、イロイロ州に次いで三番目になっている〔図4参照〕。

次に流入人口を見てみると、一九七五年から一九八〇年では、男性三九六二人、女性四一九六人、計八一五八人では、

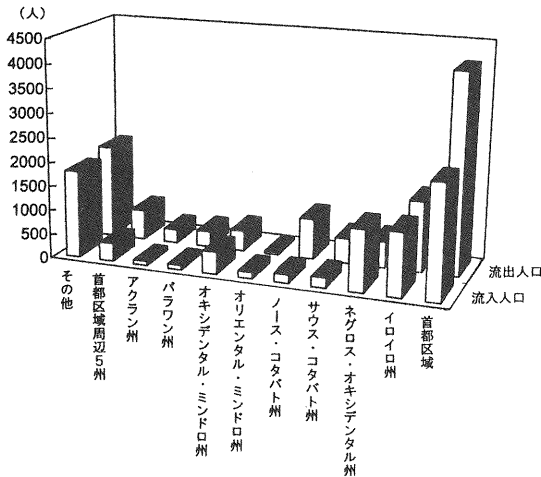


図3 アンティーケ州における人口の流入流出 (1975~1980年)

(出所) Province of Antique, Profile of the Province of Antique(unpublished)より作成。

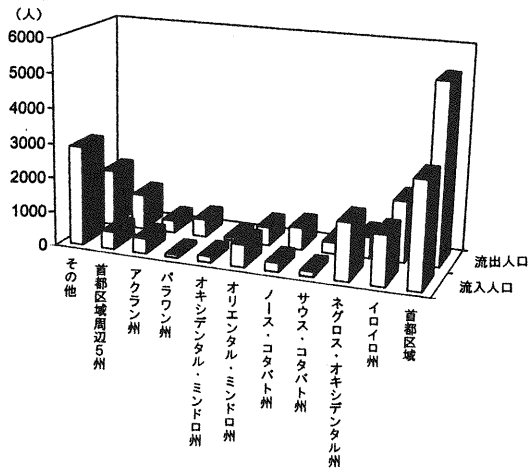


図4 アンティーケ州における人口の流出入 (1985～1990年)

(出所) Province of Antique, Profile of the Province of Antique(unpublished) より作成。

首都区域からの流入が二三一一人、以下イロイロ州、ネグロス・オキシデンタル州、オキシデンタル・ミンドロ州、首都区域周辺五州の順である。

一九八五年から一九九〇年では、男性五七四七人、女性五六二〇人、計一万一三六七人とこちらも増加しているが、ここでは男性の数が女性を上回っている。首都区域三〇六八人、以下ネグロス・オキシデンタル州、イロイロ州、オリエンタル・ミンドロ州、首都区域周辺五州の順である。

この資料からみると、アンティーケ州の人口は、首都区域および周辺五州、イロイロ州、ネグロス・オキシデンタル州、そしてミンドロ両州の間で活発に動いていることがわかる。ミンドロに関しては、一九七五年から一九八〇年まではオキシデンタルであったのが、一九八五年から一九九〇年ではオリエンタルという推移がみられる。

人口移動の規模からいえば、首都区域および周辺五州とイロイロという、都市部・産地地域との人口移動が圧倒的である。同じ都市部・産地地域でも、ビサヤ地区の中心地であるセブとの間には、わずかな人口移動しかみられず、アンティーケ州の人々はマニラ首都圏志向であることがわかる。

また、全体では流出人口が流入人口を上回っているが、一九七五年から一九八〇年と一九八五年から一九九〇年を

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

比較すると、男性の流出は流入を九七人下回り、一方女性は一五五八人増加し、この女性流出増加の結果として流出人口が押し上げられていることになる。

ネグロス・オキシデンタル州は、砂糖労働者の目的地と目される州であるが、人口移動をみると、一九七五年から一九八〇年では流出五四三人、流入一二五七人、一九八五年から一九九〇年では流出六二九人、流入一六六三人と、一貫して受入れ側になっていることがわかる。ただし、砂糖労働者はライフ・タイム移住者ではなく、季節労働者であるため、その数がどこまで正確にこの数値に反映されているかは疑問な点がある。

ロペス・ゴンザガによれば、ネグロスの砂糖労働者には、サカダ、パガヤオ、ドウマアンの三つのグループがある。サカダは収穫時に別の地域で雇用され特定砂糖農園に送り込まれる労働者、パガヤオは特定砂糖農園に常時居住する労働者、ドウマアンは砂糖農園を移動して雇用される労働者という違いがある。アンティーケ州からの砂糖労働者は一般に一括してサカダと考えられているが、実際にはネグロスに移住し、パガヤオあるいはドウマアンとなったケースも存在するに違いない。しかし、ネグロスからの人口流入について、アンティーケ州出身の砂糖労働者で、一九七五年以前に移住した者が帰州しているのかどうかは不明で

ある。

また、男女の内訳をみると、一九七五年から一九八〇年では流出、流入どちらも女性が男性を約一〇〇人上回っており、一九八五年から一九九〇年では、流入は九九人、流入は三九人、男性が女性よりも多くなっている。しかし、いずれにしても、全体として女性の多さがめだっており、ネグロス・オキシデンタル州が、男性労働者に限られたサカダ以外に、女性に対しても雇用機会を提供する地域であることがわかる。

つまり、従来アンティーケ州のイメージとして定着していた「ネグロスへの男性砂糖労働者の移動」という図式は、この資料にみられる限り、流出人口比でも男女比でも成り立たないのである。

3 アンティーケ州シンボラ村

調査村の選定と調査方法

調査村は、砂糖労働者を現在も輩出することと、世帯数一〇〇前後という二つの基準で選定された。州政府にも砂糖労働者の実態を示す資料はなく、サカダの村の選定は、聞き込み情報に拠った。クラシイ町シンボラ村以外にも、サカダの村は数多くあるにちがいない、特にセバステ町には

多いと一般にいわれているが、今回の調査では確認することができなかった。

聞き取り調査は、一九九六年一〇月から十一月にかけて、調査票を用いて行なわれた。インタビュは国語とされるフィリピン語とアンティーク州語のキナライア語で行われ、キナライア語の通訳者が常時同行した。

調査村の概要

アンティーク州北部のクラシイ町シンボラ村は、標高約六〇〇メートルの位置にあり、土地面積七三ヘクタール、その七五%が傾斜八%以上の山地部に属する村落である^①。県道からビタットン・スール村に入り、そこから沢伝いに二時間、山を二つ越えるとシンボラ村の集落に達する〔図5参照〕。

村の古老によると、その昔、ここの住民はシャオ、つまり小さい人々と呼ばれていたという。ある時、別の部族が入り込んできて、戦争が起こった。両者は川で激しく戦い、川の水に血が混ざって泡立った。その泡にちなんで、この土地はシンボラ（シャオの泡）と呼ばれるようになったというのが村名の由来である。

アンティーク州は、従来から反政府武装勢力の強い地域とされ、深い山間には数多くのゲリラ部隊が存在するとい

われていた。シンボラ村は、東側を隣州アクランと接する奥まった位置にあり、フィリピン政府軍にとって戦略上重要な村落であった。そして、一九八七年一月、村内に駐屯していた政府軍とゲリラが撃ち合いをし、死傷者が出るという事件が起こった。そのため、シンボラ村の全住民は、低地部のビタットン・スール村に避難、現在に至るまで一〇年にわたって、国内難民としてビタットン・スール村内にとどまっている。

現在も、山地部のシンボラ村は政府軍の監視下にあり、時々軍隊のジープが山へ入っていく姿を見る。しかし、近年、情勢は安定しており、村へ帰る人も出てきた。完全に帰村した者、週末だけ帰る者、家だけ建てた者、野菜やココヤシなどを植え、ときどき世話をしに帰る者など、徐々に元の村へ帰る動きが見え始めている。

現在、シンボラ村民は、主にビタットン・スール村の牧草地に点在して住んでおり、その地域は関係するNGOによって再定住地区と呼ばれている。シンボラ国内難民に関して、行政側には具体的な対策がない。帰村を促進するでもなく、再定住地区を公式に指定して、リハビリテーション計画を実施するでもなく、進退は住民の意志に任ざられている。

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

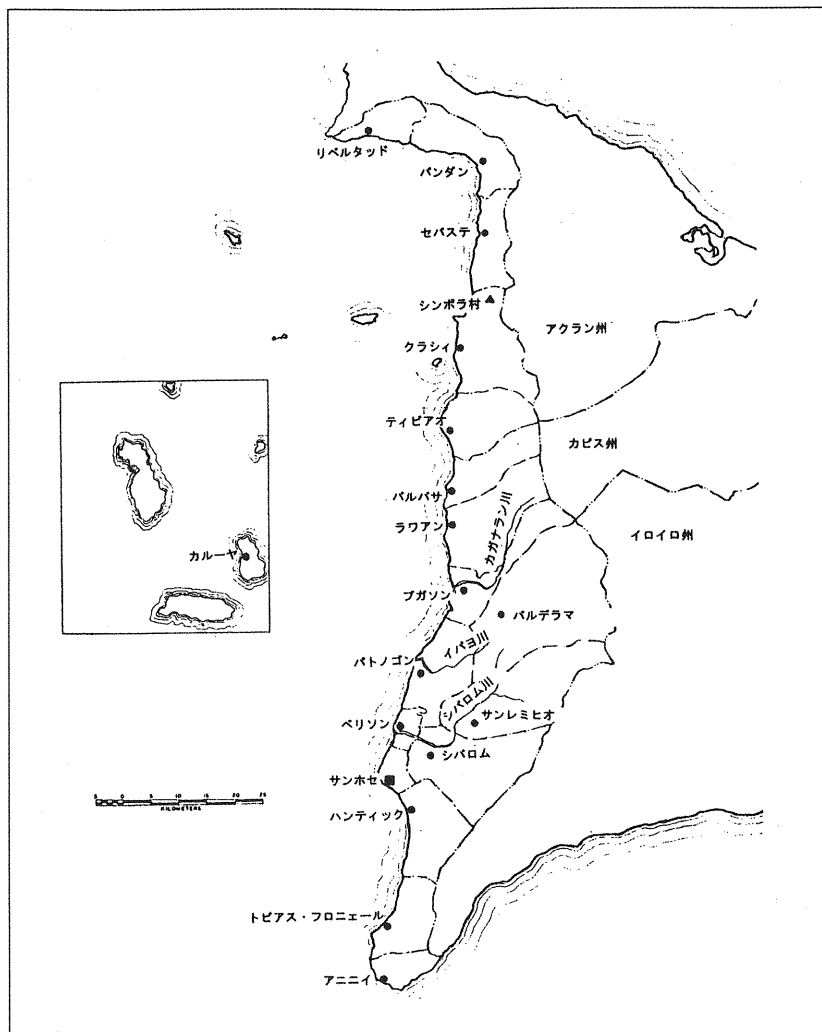


図5 アンティーケ州

シンボラ村民は、地代を払うか、あるいはその土地を購入して家を立て、日常生活は全般的に安定しているように見える。子供たちもビタットン・スール村の小学校へ通い、中にはハイスクールに進む者もいる。山地部のシンボラ村には学校がなかったので、子供のためにはビタットン・スール村のほうが都合がよいという人もいる。しかし、シンボラは一九八七年以降も独自の村議会を保持しており、ビタットン・スール村に所属しようという意見はまったく聞かない。三〇代以上では、小学校さえ建てば山に帰りたい、将来は帰るつもりである、という人が大半である。

ここでは、ビタットン・スール村におけるシンボラ村民の居住地を再定住地区として、話を進めることにする。

人口と就業

一九九〇年国勢調査では、住民は難民として扱われたため、シンボラ村の人口は空欄となっている。しかし、利用できる数値を挙げると、一九七〇年には三六七人^⑮、一九七五年には三八五人・七四世帯^⑯、一九九二年には四七一一人・九〇世帯^⑰とわずかに増加の傾向を見せているが、一九九六年の村議会報告では三六六人・八八世帯、シンボラ村を担当するソーシャル・ワーカーによれば三三七人・七八世帯とさらに少なくなっている。

七八世帯の内、一世帯はネグロス・オキシデンタル州、一世帯はオキシデンタル・ミンドロ州に出かけていて不在、七世帯はすでに帰村していて、聞き取り調査をすることができなかったもので、以後、六九世帯を対象に話を進めていくことにしよう。

図6は、シンボラ村住民の年齢別人口構成を示したものである。フィリピンの年齢別人口構成はきれいに裾広がりになっているが、シンボラ村では図に示されているように、二〇代の人口が少ないのが特徴的である。特に女性の寡少がめだっている。インタビューによれば、二〇代の女性で村に住んでいるのはほとんどが既婚者であり、一方、独身者は出稼ぎに行っていて不在ということである。

世帯構成は、核家族四六世帯、拡大家族一五世帯と、核家族が圧倒的に多い。一世帯の平均人数は四・九七人であるから、夫と妻に未婚の子供三人というのが、平均的な世帯構成であろう〔図7参照〕。

しかも、夫妻ともにシンボラ村出身という組合わせが多く、どちらかがシンボラ村以外の出身というカップルは一組で、全体の一五%しかない。その内、妻が村外出身のケースが七組、出身地はクラシイ町外アンテイーケ州内が二人、ネグロス・オキシデンタル州が二人、その他カピス州、イロイロ州、レガスピ州が一人ずつ。これに対して、

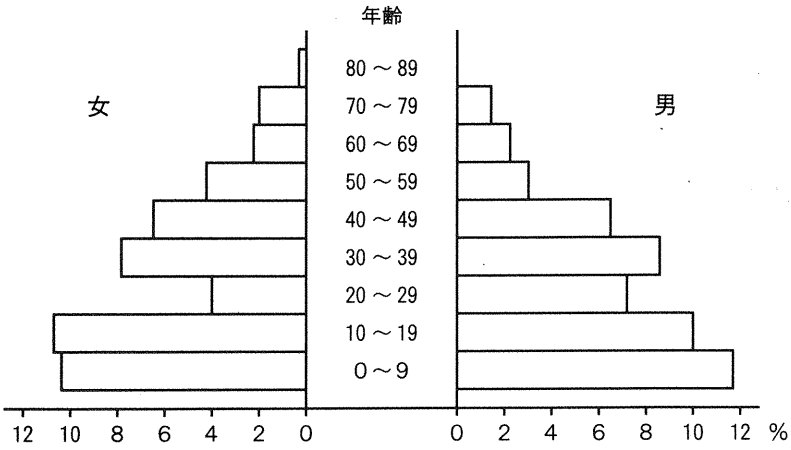


図6 シンボラ村における年齢別人口構成

(出所) 1996年のフィールドリサーチによる。

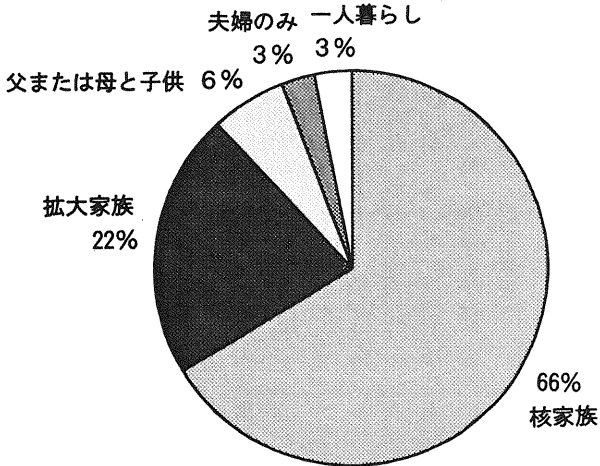


図7 シンボラ村における世帯構成

(出所) 1996年のフィールドリサーチによる。

村外出身の夫は、すべて隣村から来ている。

表1は、一五歳以上の労働人口での主要な生業を示したものである。これによると、自作農、小作農が三八人で三一・四%、農業労働が六八人で五六・二%、この二つで全体の九割近くが占められている。

その他の収入源として、ドライバー、大工、カゴ作り、そして村議員の報酬があがっているが、聞き取り調査によると、この他にも炭焼き、漁業、野菜や薪の販売、蜂蜜採集、家事労働、年金生活者などが存在する。漁業の内、一人は山地部の沢で川魚やカニを獲る漁業である。また、ここでいう家事労働とは、世帯メンバーによる無報酬の家事労働ではなく、他世帯の家事を請負って報酬を得る労働のことである。

ザル・カゴ作りは、家内工業として生産しているのではなく、村内の時々の注文に応じている程度である。インタビュールによれば、製品を作って一個二〇ペソの手間賃をもらうよりも、農作業を手伝いについて賃金をもらうほうが、よっぽど実入りがよいということだ。このような伝統的な家内工業は廃れて行く方向にあるようである。

年収をみると、表2に示されているように、五〇〇〇ペソ未満（一ペソ＝約五円）の世帯が七一・六%にも上る。しかし、月四〇〇ペソ前後で生活することは、現実にはか

なり難しいといわなければならない。おそらく、この数値は、米による収入と定期的な現金収入のみで、折々の農産品販売や仕送りなどによる臨時収入は含まれていないと考えられる。

ちなみに、ビタットン・スール村では年収五〇〇〇ペソ未満の世帯が四七・九%である。どちらの村でも一万ペソ未満の世帯がほぼ九割でありながら、ビタットン・スール村のほうが五〇〇〇ペソ以上の世帯数がやや多く、わずかながら平均的生活水準が上ということができよう。

クラシイ町役場の資料で生業をみると、シンボラ村人口の半数が農業労働者であるのに対し、ビタットン・スール村では自小作農が五三%で、農業労働者二五%となっている。また、ビタットン・スール村ではサカダは一人もいない。さらに、農家以外にも、漁家、トライシクル・ドライバー、従業員、ヤシ酒売り、小売りなど現金収入のある職業のパラエティがあることも、ビタットン・スール村の生活水準を押し上げる要因となっていると考えられる。

土地が少しでもあれば砂糖農園に働かせることはない、という声をアンティイケ州各地で聞いたが、この二つの村の例でも、自小作農の多いビタットン・スール村ではサカダは存在せず、農業労働に生活の資を頼る比率の大きいシンボラ村では、男性の大多数がサカダを経験していること

表1 シンボラ村およびビタットン・スール村の生業

	シンボラ村 (人)	ビタットン・スール村 (人)
農家	38	244
漁家	—	34
会社従業員	—	38
農業労働者またはサカダ	68	114
運転手	1	8
大工	1	2
ヤシ酒売	—	13
小売商	—	10
村会議員	10	10
年金生活者	—	14
ザル・カゴ製造者	3	—
合計	121	464

(出所) クラシィ町役場資料 (1996年) より作成。

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態 (永井)

表2 シンボラ村およびビタットン・スール村における一世帯当りの年収

	シンボラ村 (世帯)	ビタットン・スール村 (世帯)
5,000 ペソ未満	63	160
5,000 ~ 9,999	16	132
10,000 ~ 14,000 *	6	28
15,000 ~ 19,999	2	5
20,000 ~ 24,999	1	—
25,000 ~ 29,999	2	—
30,000 ~ 34,999	—	7
35,000 ~ 39,999	—	—
40,000 ~ 44,999	—	1
45,000 ~ 49,999	—	—
50,000 ペソ以上	—	1
合計	88	334

* 10,000 ~ 14,999 の誤りか。

(出所) クラシィ町役場資料 (1996年) より作成。

がわかる。サカダを含むシンボラ村の出稼ぎについては、
章をあらためてみていくことにする。

農業

シンボラの農作物は、山地部のシンボラ村では米、トウモロコシの他に、サトイモなどの根茎類、バナナ、ココヤシ、ジャックフルーツ、蔬菜類がみられるのに対して、
特定住地区では主に米である。世帯ごとの耕作地をみると、
公共灌漑施設からの用水を使っているところはなく、天水および自然流水による水稻栽培を行っているのが一五世帯、
陸稻栽培が一八世帯、傾斜八%以上の山地部で稲作以外の作物栽培が五世帯となっている。また、少なくとも一九八七年までは、山地部で焼畑耕作も行われていたということであるが、現在はみられない。

アンティヶ州の気候は、五月から一〇月にかけて雨季が現れ、一月から翌年四月まではほとんど雨のない乾季が訪れる典型的な西海岸型気候であるが、シンボラ村、ピタットン・スール村などの位置するクラシイ町北部は、パナイ島西部脊梁山脈中の最高峰といわれるマジヤアス山を始めとして一〇〇メートル級の山に囲まれており、一月から四月の乾季にかけても雨の降る日が多く、地面の乾く暇がないといわれている。

史苑 (第五八卷一号)

水稻栽培は二期作が主で、雨量によっては三期作が可能である。第一期は五月から八月、第二期は九月から十一月、第三期は翌年一月から四月というのが標準的で、二期作の場合はそれぞれ前後一カ月ほどずれることがある。陸稻栽培は年一回で、四―五月に種籾を播いて、九―一〇月に収穫する。

アンティヶ州の水稻栽培では、苗代を作って苗を育ててから本田に移植する作業は、あまり行なわれなくなっている。田植や収穫時に行なわれていた労働力交換ヒルオアナイの習慣も、田植が直播に取って代わられるにつれて消滅し、農作業の後の宴会の楽しさも、もう昔話になっている。

農作業の手順は、まず、前期の藁を鋤込んだ土を、水牛か耕耘機を使って起こし、水を入れて均す。

種籾を播く三日前に、ゴールデンコホールを殺す殺虫剤を撒く。ゴールデンコホールは、水際の草や石に明るいピンク色の卵をびっしりと生みつける大型のタニシに似た害虫で、繁殖力が非常に強いといわれる。発芽したばかりの柔らかい苗を好んで食べるので、これを放置しておく、
幼苗が根こそぎやられてしまうという。

直播はダイレクトと呼ばれ、栽培品種にはIR系などの改良品種が多い。品種の選択は、手に入るものを使うとい

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

うのが実状である。農家ごとに栽培する品種もまちまちで、また、一農家で数品種を同時に使っているというケースはほとんどなかった。

籾を播き終わると、除草剤を散布する。効き目がなくて雑草がたくさん生えてくるようであれば、さらにもう一度散布する。直播では手作業でも除草は難しく、除草剤は欠かせないものとなっている。この後、もし金銭的に余裕があれば、化学肥料が投与されることもある。

それから、ゴールデンコホール以外の害虫に対する殺虫剤が散布される。殺虫剤・除草剤散布作業は、どちらも背負式ポンプの散布器具で行われるのでスプレと呼ばれる。一缶最低三〇〇ペンはする薬品類は高価で、現金がない場合は、収穫時に籾米払いの約束で掛払いをしなければならぬ。殺虫剤・除草剤は、いくら高くても、収穫を失わないためには、ぜひ必要なものと考えられている。

収穫には人を雇うのが普通である。以前は労働交換で行われていたというが、現在は米か、まれに現金払いで労働者を雇う。また、脱穀はすべて自動脱穀機で行なわれている。

このような農作業は、低地部の水田で行なわれているものであり、山地部のシンボラ村の農業は、また別の形態をとっていることが考えられる。耕作地面積が小さく傾斜が大きいことや、陸稲の比率が大きいことも、低地部の農業

とは異なる要素である。

クラシイ村役場の資料によれば、シンボラ村の稲作農地経営規模は、一世帯当たり平均〇・五八ヘクタール、生産量二〇・七カバン、一ヘクタール当たり平均収穫量一・七八トンで、アンテイーケ州平均収穫量の三・二五トンからみると、半分程度にしかない。ちなみに、昨年の陸稲はネズミの害でほとんど収穫できなかった、ということであるから、それもこの数値に影響しているのかもしれない。

直播よりも田植のほうが収穫がよいことは知られているのであるが、田植をするとなると、家族労働だけでは手が足りず、人を雇うとなればお金が足りず、どうしても直播・除草剤の形に落ち着く。逆にいえば、金銭的に余裕があれば、人を雇って田植をするケースもあり、州内でも多少低地が広がり、耕作地区画面積の比較的大い地域では条植えを見ることがある。

農地保有形態をみると、①土地所有権を持つ、②農地改革計画にそって所有権を申請中、そして③法的所有権はないが抵当物件として耕作地を事実上入手という三種類の土地持ち世帯は、合計三三軒で、農業世帯の半数以上を占める。しかし、その内訳をみると、自作農だけではやっていけず、農業労働を兼業しなければならぬ世帯が一〇軒、そして土地を所有しているが、あまり収益をあげないので現

在耕作をやめている、あるいは、家族内に働き手がないので放置してあるという世帯が三軒含まれている〔表3参照〕。農地改革計画にそって申請中の耕作地は、どれも一ヘクタール以上であるが、山地部に位置しており、陸稲、根菜類、ココヤシ、バナナ、マホガニーなどを試験的に栽培しているにすぎない。

小作農については、刈り分け小作が八軒、小作ではあるが小作料を払わなくてもいいことになっている世帯が三軒であった。地主はすべてビタツトン・スール村の人である。小作料の比率は、地主と小作が一对二か、折半である。種籾や殺虫剤、除草剤、脱穀費、労働者賃金などの経費については、シェアが一对二の場合は小作持ちであるが、折半の場合には、地主持ちもあれば、小作持ち、殺虫剤・除草剤は地主持ちでそれ以外は小作持ち、あるいは経費も折半などがあって、一様ではない。

アリエンドは、もともとスペイン語で借用という意味であるが、ここでは定額の小作料を払うということで、定額小作をさしている。アリエンドは一世帯であった。

農業労働

土地なしの農業労働者世帯は一四軒、これに零細自作農で農業労働兼業などを含めると二七軒となる。しかし、農

史苑（第五八巻一号）

表3 シンボラ村における土地保有形態および農業労働

	(世帯数)
自作	15
自作および農業労働	10
質受地耕作 ⁽¹⁾	5
耕作放棄 ⁽²⁾	3
刈分小作	8
小作料けなし小作 ⁽³⁾	3
定額小作	1
共有自作 ⁽⁴⁾	0
土地なし農業労働	14
合計	59

- (1) : 抵当物件として耕地を取得し事実上の用益権を行使しているが、法的な所有権はなし。
 (2) : 耕地を所有しているが、耕作は行っていない。
 (3) : 収穫を地主と分けず、全部自分の収入とすることができる小作。
 (4) : 家族、親戚などと耕地を共有。共有する人数によって耕作機会が回って来る年数が決まる。例えば、5人で共有した場合、5年に1回その耕地で耕作することができる。

(出所) 1996年のフィールドリサーチによる。

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

業労働は、数少ない日銭の入る収入源であるため、現金や米の必要に応じて、これ以外の世帯からも臨時に参加する者がいる。

現在、農作業に労働交換は見られず、田植は例外的になつており、農作業は賃金労働でまかなわれているのが普通である。

整地作業の賃金は、男性は食事付きで一日六〇―七〇ペソ、女性は半額といわれているが、水牛や耕耘機を使うのならば、男性を一人雇えば、大概は作業がすんでしまうので、女性はあまり参加しない。水牛込みで食事付き一〇〇ペソ、耕耘機による賃耕の場合は雇えば二〇〇ペソが相場である。

除草剤があれば、除草作業は要らないはずであるが、撒布後雨量が多くて流れてしまつたり、薬品を希釈しすぎて効果がなかつたりで、再度手で除草しなければならぬ場合がある。これは、男女差はなく一日五〇ペソということであるが、除草作業での雇用はそう多くはない。

収穫は、現金払いであれば一日五〇ペソであるが、現金よりも米で払われることのほうが多い。収穫の内、二〇サックにつき一サックを労働者の取り分とし、人数で分ける。この支払い方法を、ボルシェント（パーセントの意味）といい、比率は異なるが脱穀機や精米機の支払いにも使われ

る。収穫の取り分は、収穫量と人数によつて変わるが、おおよそ二―五ガンタ（一ガンタは約二キロ）になるという。例えば、家族三人が刈取りに参加し、収穫がよくて一人五ガンタもろうとする。そして、一期に一〇日間働けたとすると、粃米六サックを得る計算である。

耕起や除草の作業では、その耕作地の持ち主が差配人を雇つて、必要な人数だけの労働者を募るが、刈取りに限つて、参加したい人はだれでも来てよいという不文律がある。つまり、世帯内に一〇代、二〇代の子供がたくさんいて、親もまだ働くことができ、シーズン中毎日のように刈取りに参加して、そしてその時の収穫がよければ、家の中に米のサックを積み上げることができるのである。

一方、働き手が一人しかなく、労働日数も限られ、しかも収穫が悪い時は、食べる米もついで購入しなければならぬ状態になる。同じ土地なし農業労働者世帯の中でも、このようにして、実際の生活状況にかなりの差が見られる。

畜産、その他の非農業労働

シンボラ村でも、鶏、アヒル、豚、牛、水牛などの家畜が飼われている。豚、牛、水牛は、所有者は別の人で、飼っている人はあづかつて育てているだけというケースが多い。これは、県道に近い集落内に住んでいる人が、牧草地近く

に住む人に飼育を依頼する慣行で、サゴッドと呼ばれ、アンティーク州ではごく一般的に行なわれている。サゴッドでは、その家畜に生まれた最初の子を所有者の、次の子を飼育者のものとする取決めがあり、飼育者としては、世話をよくしさえすれば、資金がなくても家畜を手に入れることができる。

基本的に、家畜は、家庭で消費するためのものではない。使役用の牛と水牛は別であるが、必要な時に売って換金する。よく育つた豚は、家畜仲買人に売れば一〇〇〇ペソ以上になる。

市場に余剰作物を持ち込んで売るのは、それほど一般的な経済活動ではない。ほぼ定期的に毎週木曜日のピタットン・スール村の市で商いをしているのは四人、その他に現金の必要に応じて、鶏やアヒルを売りにいく者もいる。

洗濯や子守などの家事労働も、現金収入を得る一つの方法である。問題は、農村部では需要がないことで、都市部まである程度遠距離を移動する必要があるのが普通である。シンボラ村では、クラシイ町まで出かける者が一人、州都サンホセが一人、そして州境を越えたアクラン州カリボ市で住込みをしている者が四人おり、さらに例外的にピタットン・スール村で子守をしている者が一人いる。この七人はすべて女性である。

史苑（第五八卷一号）

4 シンボラ村の出稼ぎ労働者

出稼ぎ労働者の一般的傾向

図8と図9は、シンボラ再定住地区住民の内の出稼ぎ経験者に、その目的地と職種をたずねた結果である。目的地は、ネグロス・オキシデンタル州と、首都区域およびその周辺地域であるブラカン州とラグナ州が圧倒的に多く、前者へは出稼ぎ労働者数の三二%、後者へは五四%が行っている。男性出稼ぎ労働者の目的地はその六三%がネグロス・オキシデンタル州、女性の場合は八一%が首都区域である。職種別にみると、家事労働は女性に多く、男性ではサカダが突出している。

目的地と職種の関係では、家事労働は首都区域、サカダはネグロス・オキシデンタル州と、目的地と職種がほぼ一致しているが、サカダの行き先には、サウス・コタバト州とラグナ州カンルバンも少数ながらある。ネグロス・オキシデンタル州の女性は、サカダの夫と一緒に行ったのであるが、農園労働者ではなく、主婦か食堂の料理人として働いている。建築は首都区域、運送関係はマニラおよびバギオ、養豚・養鶏はブラカン州である。パラワンとオキシデンタル・ミンドロ州の労働者は、小作か農業労働に従事しており、隣州アクランとイロイロの女性は家事労働である。

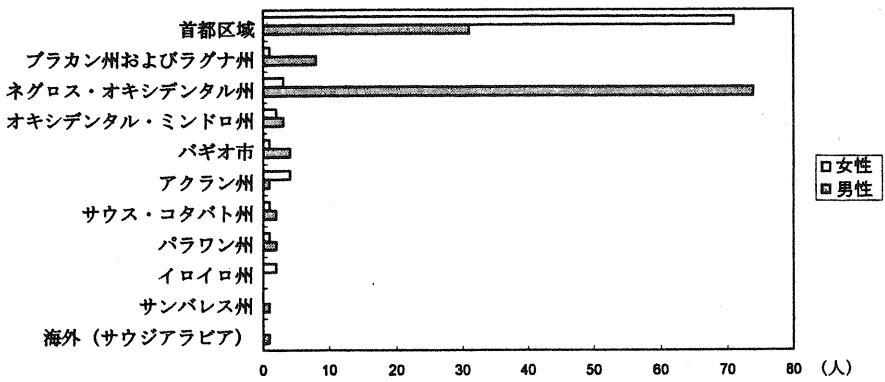


図8 シンボラ村出稼ぎ労働者の目的地

(出所) 1996年のフィールドリサーチによる。

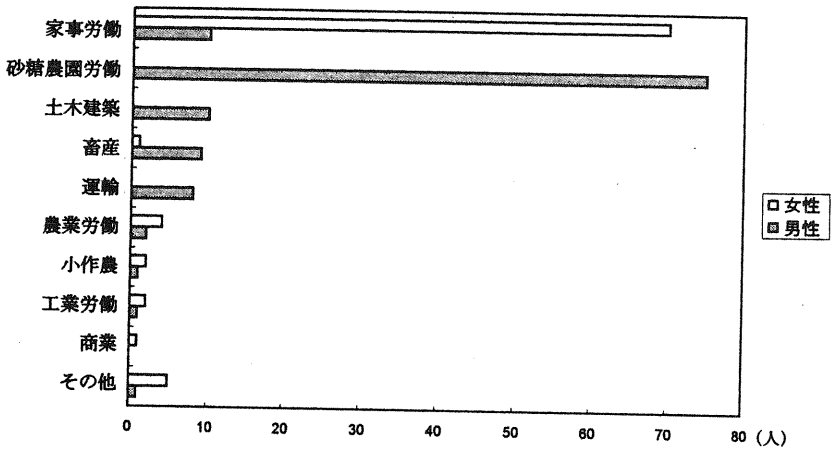


図9 シンボラ村出稼ぎ労働者の職種

(出所) 1996年のフィールドリサーチによる。

シンボラはサカダの村といわれている。この二つの図をみると、確かにネグロス・オキシデンタル州の砂糖農園へ行く男性労働者は多い。しかし、首都区域へ行く女性家事労働者およびその他の男性労働者の合計数は、それを上回っていることがわかる。

さらに、一九九六年現在で出稼ぎ地にいる労働者数では、サカダ一九人で、それ以外では七一人（男性三〇人）である。一九九六年に限っても、サカダよりも、それ以外の職を求めて出稼ぎに行く者のほうが多い。

出稼ぎ労働者の既婚・未婚の別をみると、男女共に未婚者が約八〇%となっている。独身の頃から働き始めて結婚後も続けている者は、全体の二〇%以下で、男性では季節労働のサカダが大半である。女性の既婚者は、結婚してから家族ごと移動した例が大多数である。

さらに、何回（何年）サカダに行ったかという質問では、一〜三年が全体の五〇%を占める。一〇回までは漸次減少の傾向が見えるが、一方で一〇回以上という者が一人で二三%、二〇回以上のベテランが四人もおり、平均は六・六回となっている。ちなみに、二四人が回数不明と答えているが、これは、思い出せないほど昔のことか、あるいはは数え切れないほど何回も行ったかのどちらかの理由による。サカダに比較すると、マニラへの出稼ぎの年数には、一

史苑（第五八巻一号）

定の傾向が見られない。しかし、その九三%が一〇年以上であり、一年以上の勤続者の大半は、ブラカン州の大規模養豚農家への出稼ぎという比較的安定した職に就いている者である。

サカダ

シンボラ村では、男性人口の内約半数がサカダを経験している。一〇月、ネグロスの砂糖農園でサトウキビの収穫が始まる頃になると、山地部のシンボラ村にも、サカダ雇用代理人がやってきて、村の男たちがひとまとまりになって出かけたそうである。再定住地区に来てからもその状況は変わらず、一九八四年の急激な砂糖生産調整の前後で、特にサカダ雇用に変化があったというような話は聞かれなかった。一九八五年から九五年まで、毎年続けて行っていたという者の数は二〇人である。

六カ月のサトウキビのシーズンの後、サカダたちは、うまくいけば、一〇〇〇ペソから二〇〇〇ペソ、あるいはそれ以上の現金を持って帰ってくるができる。何年もサカダを続け、これからも行こうとしている人たちは、行先の砂糖農園の労働条件がよく、実質的な収入を得ている人たちである。

しかし、このような条件に恵まれている者は、そう多く

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

はなく、もうサカダはこりこり、という人たちの理由は、第一に持ちかえる現金がない、第二に仕事が見つくて体もたない、の二つである。

持ちかえる現金がないのは、出発前にアンテシーポという前払い制度があり、働いて得た収入から差し引かれることになっている。サカダの農園での日常生活は、男性だけの寄集まりであるため、食堂での飲食、酒、タバコなど出費が多く、中にはそれで収入を使い果たしてしまいうもいる。収入を使い果たした上に差し引かれれば、借金しか残らない。その借金を返済するために、翌年もまた行くというケースもある。妻と同行した場合、妻が家事を担当し家計を管理するので、出費がおさえられ、持ち帰る現金が多くなるという。中には、母親が一緒に行ったという人もいる。

しかし、子供ができると、妻は夫と同行するわけにはいかず、村に残る。夫が半年もサカダに行ってしまうと、その間、家族が食物の調達からして困る。それで、結婚して子供ができると、もうサカダには行かなくなったという男性が多い。

サトウキビ収穫労働は過酷なことで知られており、シンボラでも一、二カ月で逃げ帰って来たという者が数名いる。しかし、それでも現在行く者があるのは、前年の借金が払

い切れず、返済のために今年も行かなければならないという場合と、借金がなければ、まとまった現金を手にして帰村できる可能性があることの二つの理由が存在する。さらに、一九七五年からサカダにも社会保障制度が適用になり、年金が出るようになったことも、ある程度誘因として働いているようである。

ものは試しで今年初めて行ってみる、という一〇代の青年も二人いた。

出稼ぎ労働者からの送金

住民の大多数が出稼ぎを経験しているシンボラでは、その経済も出稼ぎによる送金に大きく依存しているだろうと考えられる。しかし、定期的な送金があると答えた世帯は、ごくわずかである。ほとんどは、必要がある時に送金を頼み、郵便為替か、親戚や知り合いに託して手持ちで送ってもらうというパターンである。

都会では生活費がかかるということは知られており、定期的な仕送りを望む声はない。それよりも、まとまった額が必要な時頼れる者として、出稼ぎ労働者は考えられている。そうはいっても、子どもの学用品購入から宅地代まで、送金を必要とする機会は多い。シンボラ村内の収入では、食べていくことは可能かもしれないが、それ以外の出費に

関しては、出稼ぎ者からの送金が不可欠である。

出稼ぎ先で家族といっしょに住んでいる場合は、仕送りがなくてもそれほど非難されることはない。しかし、未婚者は送金を期待されている。未婚者の中でも、特に家事労働をしている者は、そのほとんどが住込みであり、給料を全額送金しても食べるものと寝るところには困らず、また給料の前借りが比較的たやすいと考えられているために、いっそう送金への義務感が強いようである。

おわりに

再定住地区のシンボラ村では、人々の生活の大半は、農業労働と出稼ぎ労働者の現金収入によって支えられている。自作農であっても、生活に充分なほどの収益をあげる耕作地は少なく、農業労働によって多少の現金と米を得て生活する人が多い。

クラシイ町役場に提出されている村ごとの生業リストでは、農業労働者とサカダが同じ項目に記載されるようになってきているが、それは、農業労働者すなわちサカダという考え方を示すものにほかならない。もちろん、州内の農業労働者がすべてサカダとなるわけではない。例えば、ビタットン・スール村の農業労働者数は一一人であるが、サカダ

史苑 (第五八卷一号)

は存在しない。

しかし、人口の過半数が農業労働者のシンボラ村ではサカダが多く、過半数が自小作農であるビタットン・スール村ではサカダが少ないという状況は、アンティーケの人々がいう「土地が少しでもあればサカダには行かない」という発言を裏付けているようである。この場合の土地とは、二―三期作が可能な低地部の米作地といってもいいだろう。アンティーケの土地なし農民にとつては、州内での雇用機会のごく限られている。サカダの場合、米作一期作目は農業労働者として働き、それから二期作目の整地を終え、現金の前払いをもらった上で一〇―十一月に砂糖農園へ出稼ぎに行き、その間の二期作目の収穫は世帯の他のメンバーでつとめ、四月に帰ってきて三期作目の収穫に参加するというスケジュールは、現金と米の収入のバランスからいっても、うまくいきさえすればかなりよいといえる。

また、出稼ぎとはいっても、契約期間は半年で帰ってくる事ができる。他の出稼ぎでは、少なくとも一年以上の労働が期待されるため、既婚者の単身出稼ぎはむずかしい。しかし、季節労働ならば既婚者でもある程度可能である。さらに、雇用代理人が村まで直接来て、目的地までのめんどうを一切みてくれるということも、他の出稼ぎ労働よりサカダへの動機づけを強化しているようである。未知の土

フィリピンの農村における国内出稼ぎ労働者の実態（永井）

地へ単独で行くことへの心理的バリアの大きさは驚くほどである。

一九世紀終りから始まったサカダは現在も続いているが、その変遷については、現時点では資料が得られていない。しかし、サカダすなわち農業労働者という図式を採るならば、その変遷には、アンテイーケ州内の農業雇用機会の変化が結びついているはずである。労働交換ヒルオアナイの消滅による農業労働への依存と、米作農法および技術の変化による労働力削減という二つの変化が、雇用機会にどう影響し、またサカダに影響したかは、今後の調査課題としたい。

さて、シンボラ村の出稼ぎ状況全般をみると、首都区域への女性の家事労働への出稼ぎが、サカダを上回って最大のグループを形成している。

一世帯当り夫婦と三人の未婚の子供が村内にとどまり、それ以外の未婚者は、主に首都区域へ出稼ぎへ行き、数年間そこで働く。男性には村内でも農業労働の雇用機会があり、季節雇用のサカダという選択肢があるが、未婚女性、特に二〇代の女性は、もっぱら出稼ぎ労働者として流出し、結婚を契機として帰村するという一定のパターンがある。既婚者が家族を残して長期に出稼ぎに行くことは、この村では例外的である。

産業部門では、製造工業などの第二次産業部門がめだつて少ない。

ここでわかることは、出稼ぎ先の職種も、仕事の内容ではアンテイーケでの生活の延長といえる点である。サカダや畜産は農業部門であり、家事労働は洗濯、料理、掃除、子守、その他の雑用である。フィリピン社会一般では、男性の家事参加の度合が高いことが指摘されているが、ここでもハウスボーイと呼ばれる男性の家事労働者が多いことは、その社会事情を反映しているといえるだろう。²⁵ さらに、第二次産業部門に含まれるが、土木建設作業は、村の男たちにとってある程度手慣れた仕事である。

ビサヤ地区の中心セブやマニラ周辺地域には輸出加工区があり、主要産業地域を形成しているが、そこへの出稼ぎは、男女ともにごくわずかである。よく知らない工場勤めよりはメイドの方がいいと村の人々は言い、また、縁故なしで求職することは、彼らには問題外である。親戚や知人がそこで働いており、就職が確実でない限り、村の人々は腰をあげようとしなない。さらに、これらの地域の雇用では、ハイスクールまたは大学卒の学歴を要求されることが、進学率の低いシンボラ出身者を遠ざけているようである。

シンボラの人々が、山地部のシンボラ村に帰りたいという希望を持つ理由には、生活環境の選好の他に、まず土地

の問題がある。山地部では居住地の土地代を払う必要がない。また、自作農の土地や、農地改革計画によってあらたに申請された土地も山地部にある。他村に住み、農業労働という限られた雇用機会を待つよりは、いつでも自分の土地で働くことができ、また働きに合った見返りを得ることのできる山の生活に帰りたいと考えているようである。また、村人にとっては山地部の村も隔絶しているわけではなく、低地部の村々との交流は避難する以前でも活発であった。つまり、山地部で農地を確保できれば、平地部での農業労働は付加収入となり、結果として雇用機会を拡大することができるのである。

食生活に関しても、山地部では食物の種類が豊富である。人々の経験では、米と野菜は田畑から、魚は沢から取得でき、肉でさえもイノシシなどの狩りの獲物がある。現金がなければ食物にも制限がある暮らしを、彼らはよことしてなく。村の人々は、山地部での生活を一種の理想郷として描くが、しかし、この生活は、一九八七年以前でも出稼ぎ労働への人口流出によって均衡を保っていたのであった。ほぼ全世帯が出稼ぎを経験しており、その大半は首都区域での都会生活に触れている。その経験が村の生活にどう影響しているのか、あるいは影響していないのか、これもまた今後の課題のひとつとなるであろう。

註

- (1) McCoy, Alfred W. (1982), "A Queen Dies Slowly: the Rise and Decline of Iloilo City". in McCoy, Alfred W. and De Jesus, Ed C. (eds.), *Philippines Social History: Global Trade and Local Transformations*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, p. 323.
- (2) Feranil, Imelda Zosa (1994), "Persisting and Changing Patterns of Population Redistribution in the Philippines". In Alejandro N. Herrin Alejandro N. (ed), *Population, Human Resources & Development*, Quezon City: University of the Philippines Press, p. 330.
- (3) Kim, Jun(1972), "Net Internal Migration in the Philippines, 1960-1970", *Journal of Philippine Statistics* 23 : ix - xxvii.
- (4) Feranil, *op. cit.* : 332.
- (5) *Ibid.* : 336.
- (6) Kim, *op. cit.* : ix-x.
- (7) Flieger, W.(1977), "Internal Migration in the Philippines during the 1960s", *Philippine Quarterly of Culture and Society* 5 : 199-231.
- (8) *Ibid.* : 226-229.
- (9) Feranil, *op. cit.* : 370.
- (10) NSIC/NSCB, 1995 *Philippine Statistical Yearbook*, Manila.
- (11) *Ibid.*
- (12) NEDA/NCSO, 1990 *Census of Population and Housing: Antique*, Manila.

フィリピン人の農村における国内出稼労働者の実態(永井)

- (31) アンティポー州政府資料 Profile of the Province of Antique (1970) 年報(5)。
- (32) NEDA, *Census of Agriculture, Antique : 1960, 1971, 1980, and 1991* Manila.
- (33) フィリピンアンティポー州人口移動の資料は前掲 Profile of the Province of Antique(2) 参照。
- (34) Lopez-Gonzaga, Violeta (1985). *The Sugarcane Workers in Transition: The Nature and Context of Labor Circulation in Negros Occidental, Bacolod* : Social Research Center, La Salle - Bacolod.
- (35) NEDA/NCSSO. *1970 Census of Population and Housing : Antique, Manila*.
- (36) NEDA/NCSSO, *1975 Census of Population and Housing : Antique, Manila*.
- (37) Documentation Project on the Internal Refugees in the Province of Antique (1995), *A Profile of Internal Refugees in Calsisi, Antique, October 1993—October 1994*, Antique.
- (38) クラミンノ町役場の記録に於て、ミンホトを議定したことが成られた資料がある。
- (39) 同。
- (40) アンティポー州の稲作栽培面積、生産量、平均収穫量の資料は、アンティポー農業局の1995年資料に於て。
- (41) Hollnsteiner, Mary (1991), "The Wife", in Department of Sociology-Anthropology, Ateneo de Manila University (ed.), *SA 21 : Selected Readings*, Quezon City : The Of-

fice of Research and Publications, pp. 251-275.

Hollnsteiner, Mary (1991), "The Husband", in Department of Sociology-Anthropology, Ateneo de Manila University (ed.), *SA 21 : Selected Readings*, Quezon City : the Office of Research and Publications, pp. 276-284.

Medina, Belent. G. (1991), *The Filipino family: A Text with Selected Readings*, Quezon City : University of Philippines Press.

Chant, Sylvia and McIlwaine, Cathy (1995), *Women of A Lesser Cost : Female Labour, Foreign Exchange and Philippine Development*, Quezon City : Ateneo de Manila University.

伊豆川 Jeanne Frances Ilo (1989, 1991) の論文は、同誌の専載資料に於てある。

参考文献

- Abbad, Ricardo G. (1981), "Internal Migration in the Philippines : a Review of Research Findings", *Philippine Studies* 29 : 129-143.
- Abejo, Socorro (1985), "Migration to and from the National Capital Region: 1975-1980", *Journal of Philippine Statistics* 36 : ix-xxiii.
- Bary, Francesca (1986), *The Rice Economies: Technology and Development in Asian Societies*. Berkeley : University of California Press.
- Boserup, Esther (1970), *Women's Role in Economic Develop-*

ment, London : George Allen Unwin.

Cadelina, Rowe V. (1986), "Poverty in the Upland : Lowland Migrant Swiddeners in the Balinasasayo Forest, Negros Oriental". in Abad, Ricardo G., Cadelina, Rowe V. and Lopez-Gonzaga, Violeta (eds.), *Faces of Philippine Poverty: Four Cases from the Visayas*, Quezon City : Visayas Research Consortium, Philippine Social Science Council, pp. 163-186.

Castillo, Gelia T.(1991), "Family and Household : The Microworld of the Filipino". in Department of Sociology-Anthropology, Ateneo de Manila University (ed.), *SA21 : Selected Readings*, Quezon City : the Office of Research and Publication, Ateneo de Manila University, pp. 244-250.

Chant, Sylvia and McLwaine, Cathy (1995), *Women of a Lesser Cost : Female Labour, Foreign Exchange and Philippine Development*, Quezon City : Ateneo de Manila University Press.

Cruz, Ma. Concepcion J. (1986), "Population Pressure and Migration in Philippine Upland Communities". in Fujisaka, Sam, Saiise, Percy E. and Del Castillo, Romulo A.(eds.), *Man, Agriculture and the Tropical Forest : Change and Development in the Philippine Uplands*, Bangkok : Winrock International Institute for Agricultural Development, pp. 87-118.

Eviota, Elizabeth Uy(1992), *The Political Economy of Gender : Women and the Sexual Division of Labour in the*

Philippines, London : Zed Books.

Feranil, Imelda Z. (1994a), "Persisting and Changing Patterns of Population". in Herrin, Alejandro N. (ed.), *Population, Human Resources and Development, the Center for Integrative and Development Studies*, Quezon City : the University of the Philippines, pp. 325-374.

Feranil, Imelda Z. (1994b), "Female Migrants to Urban Areas in the Philippines". in Herrin, Alejandro N.(ed.), *Population, Human Resources and Development, the Center for Integrative and Development Studies*, Quezon City : the University of the Philippines, pp. 375-404.

Flieger, Wilhelm(1977), "Internal Migration in the Philippines during the 1960's", *Philippine Quarterly of Culture and Society* 5 : 199-231.

Hayami, Yujiro in association with Kikuchi, M., Moya, P. F., Bambo, L. M., and Marciano, E.B. (1978), *Anatomy of Peasant Economy : A Rice Village in the Philippines*, Los Banos : International Research Institute.

Hollensteiner, Mary(1991a), "The Wife". in Department of Sociology-Anthropology, Ateneo de Manila University (ed.), *SA21 : Selected Readings*, Quezon City : the Office of Research and Publication, Ateneo de Manila University, pp. 251-275.

Hollensteiner, Mary(1991b), "The Husband". in Department of Sociology-Anthropology, Ateneo de Manila University (ed.), *SA21: Selected Readings*, Quezon City : the Office of Research and Publication, Ateneo de Manila

- University. pp. 276-284.
- International Rice Research Institute (ed.)(1985), *Women in Rice Farming*, London : Gower Publishing Company.
- Ishiyama, Nobuo(1993), "A Kinara'y-a Legendary Text with a Brief Outline of the Language", *Tokyo University Linguistics Papers* 13 : 185-290.
- Karkvliet, Benedict J. Triha(1991), *Everyday Politics in the Philippines : Class and Status Relations in a Central Luzon Village*, Quezon City : New Days Publishers.
- Kim, Jun(1972), "Net Internal Migration in the Philippines, 1960-1970", *Journal of Philippine Statistics* 23 : ix-xxvii.
- Kummer, David M.(1992), *Deforestation in the Postwar Philippines*, Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Ledesma, Antonio J.(1982), *Landless Workers and Rice Farmers : Peasant Subclasses under Agrarian Reform in Two Philippine Villages*, Manila : International Rice Research Institute.
- Lopez-Gonzaga, Violeta(1983), *Mechanization and Labor Employment : A Study of the Sugarcane Workers' Responses to Technological Change in Sugar Farming in Negros*, La Salle Bacolod Monograph Series No. 1, Bacolod : Alpha Publishing Co.
- Lopez-Gonzaga, Violeta(1985a), *The Sugarcane Workers in Transition : The Nature and Context of Labor Circulation in Negros Occidental*, Bacolod : Social Research Center, La Salle-Bacolod.
- Lopez-Gonzaga, Violeta(1985b), *Crisis and Poverty in Sugarcane : The Case of Bacolod*, La Salle Social Research Center Monograph Series No. 3, Bacolod : La Salle Social Research Center.
- Magos, Alicia P. (1992), *The Enduring Mararam Tradition : An Ethnography of a Kinara'y-a Village in Antique*, Quezon City : New Days Publishers.
- McCoy, Alfred W. (1982), "A Queen Dies Slowly : The Rise and Decline of Iloilo City", in McCoy, Alfred W. and De Jesus, Ed C. (eds.), *Philippine Social History : Global Trade and Local Transformations*, Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Medina, Belen T. G. (1991), *The Filipino Family: A Text with Selected Readings*, Quezon City : the University of the Philippines Press.
- NEDA, *Census of Agriculture, Antique : 1960*, Manila.
- NEDA, *Census of Agriculture, Antique : 1971*, Manila.
- NEDA, *Census of Agriculture, Antique : 1980*, Manila.
- NEDA, *Census of Agriculture, Antique : 1991*, Manila.
- NEDA/NCSSO, *1970 Census of Population and Housing : Antique, Manila*.
- NEDA/NCSSO, *1975 Census of Population and Housing : Antique, Manila*.
- NEDA/NCSSO, *1990 Census of Population and Housing : Antique, Manila*.
- Ngutigain, Titus(1985), "Trends and Patterns of Internal

- Migration in the Philippines, 1970-1980", *Philippine Economic Journal* 60, XXIV-4 : 234-262.
- NSIC/NSCB, 1995 *Philippine Statistical Yearbook*, Manila.
- Pernia, Ernesto M. (1978), "An Empirical Model of Individual and Household Migration Decision : Philippines, 1965-73", *Philippine Economic Journal* 36, XVII-1&2 : 259-284.
- Perterra, Raul(1988), *Religion, Politics, and Rationality in a Philippine Community*, Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Philippine-Canada Human Resource Development Program and VCCP-Development Program for Internal Refugees(eds.)(undated), *A Profile of Internal Refugees in Calasi, Antique, October 1993-October 1994*, the place of publication not indicated.
- Polio, Emma(1991), *Partnership with the Poor : The LRM Approach to Rural Development, Local Resource Management*, Manila : NEDA.
- Province of Antique(undated), "Profile of the Province of Antique", unpublished.
- Sonza, Demy P. (1977), *Sugar is Sweet : The Story of Nicholas Loney*, Manila : National Historical Institute.
- Szanton, David L. (1971), *Estancia in Transition : Economic Growth in a Rural Philippine Community*, IPC Papers 9, Quezon City : Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.

- Szanton, Maria Cristina Blanc(1972), *A Right to Survive : Subsistence Marketing in a Lowland Philippine Town*, University Park : the Pennsylvania State University Press.
- Umebara, Hiromitsu(1996), "Fudo to Chiri". In Ayabe, Tsuneo, and Ishii, Yoneo(eds.), *Motto Shiriai Fripin*(2nd ed.), Tokyo : Kobundo.

(トクネクホ・ホ・トリノ大学講師)